

原 遺 跡 13

—第25次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1129集

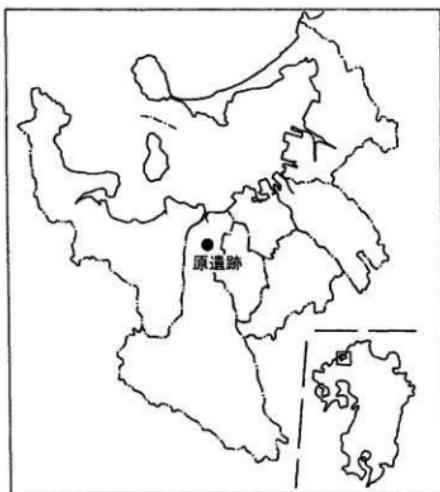
2011

福岡市教育委員会

HARA
原 遺 跡 13

—第25次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1129集



遺跡略号 HAA-25
調査番号 0917

2011

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの責務であります。また、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目指のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であります。そのため、本市教育委員会では事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、店舗建設に伴い調査を実施した原遺跡第25次調査の成果を報告するものです。

今回の調査では、弥生時代や中世後半の集落跡を確認すると共に、多数の土器や陶磁器等の生活用具が出土しました。これらは、当時の原地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、九州三菱自動車販売株式会社様をはじめとする数多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が店舗建設に伴い、福岡市早良区原8丁目1176-5において発掘調査を実施した原遺跡第25次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣・名取さつきが行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本・名取が行った。
6. 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、榎本・名取が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 40'$ 西偏する。
9. 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系(第II座標系)によるものである。
10. 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、ピットをSP、包含層をSXと略号化した。
11. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
12. 本書で記述する一部の陶磁器の分類、説明等については、以下の文献を参考とした。

横田實次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について~型式分類と編年を中心として~」

『九州歴史資料館研究論集 4』1978年

太宰府市教育委員会『大宰府糸坊跡XV-陶磁器分類編-』(太宰府市の文化財第49集)2000年

13. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、同センターに保管される予定である。
14. 本書の秋筆および編集は、榎本が行った。

遺跡名	原遺跡	調査次数	第25次	遺跡略号	HAA-25
調査番号	0917	分布地図幅名	原82	遺跡登録番号	020311
申請面積	1,163.9m ²	調査対象面積	183.1m ²	調査面積	175.7m ²
調査地	福岡市早良区原8丁目1176-5			事前審査番号	20-2-956
調査期間	平成21(2009)年8月3日～9月8日				

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
1. 原遺跡の立地	2
2. 原遺跡の地形とこれまでの調査	2
III. 調査の記録	6
1. 概要	6
2. 遺構と遺物	6
1) 堀立柱建物(SB)	6
2) 土坑(SK)	8
3) 溝(SD)	15
4) その他の遺物	16
3. 結語	17

挿図目次

第1図 原遺跡位置図(1/50,000)	3
第2図 原遺跡調査区位置図(1/6,000)	4
第3図 調査区位置図(1)(1/1,000)	5
第4図 調査区位置図(2)(1/500)	5
第5図 調査区全体図(1/100)	7
第6図 調査区北壁および東壁土層実測図(1/80)	8
第7図 SB014実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3)	9
第8図 SK001・002・003・004実測図(1/40)	11
第9図 SK007実測図(1/40)	12
第10図 SK002・003・004・007出土遺物実測図(1/3)	12
第11図 SK012実測図(1/20)および出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	13
第12図 SK012出土遺物実測図(2)(1/3、1/4)	14
第13図 SD008・010実測図(1/40)およびFS008・009・010出土遺物実測図(1/3)	16
第14図 ピット・包含層他出土遺物実測図(1/2、1/3)	17

表目次

第1表 原遺跡調査一覧表	4
--------------	---

図 版 目 次

図 版 1 (1)調査区全景(北から)
(2)調査区北壁土層(南西から)

(3)調査区東壁土層(北西から)

図 版 2 (1)調査前状況(北西から)
(2)SB014(北から)
(3)SB014-P1(西から)
(4)SB014-P6(北から)
(5)SB014-P7(北から)
(6)SB014-P9(北から)

図 版 3 (1)SK001(西から)
(2)SK001土層(西から)
(3)SK002(西から)
(4)SK003(西から)
(5)SK004(北から)
(6)SK004土層(東から)

図 版 4 (1)SK007(南から)
(2)SK007土層(南から)
(3)SK012(西から)
(4)SD008(西から)
(5)SD008(a-a')土層(西から)
(6)SD008(b-b')土層(東から)

図 版 5 (1)SD009(東から)
(2)SD010(北から)
(3)SD010(c-c')土層(南から)
(4)SD010(d-d')土層(南から)
(5)調査区周辺風景(西から)
(6)調査区周辺風景(北東から)

図 版 6 出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成21(2009)年3月16日付けで、福岡市早良区原8丁目 1176-5、1178-20、1178-21(敷地面積:1,163.9m²)における店舗建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、九州三菱自動車販売株式会社より福岡市教育委員会宛てになされた(事前審査番号:20-2-956)。

これを受けた教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課事前審査係では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である原遺跡に含まれていることから同年6月9日に確認調査を実施し、建物建築予定地の地表下約1.4mにおいて中世と考えられる土坑やピット等を確認した。この調査成果をもとに両者で協議を行なった結果、店舗建築部分についてはコンクリート杭基礎を打設する必要があり、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、当該建築箇所に該当する地番1176-5の内、建物建築面積183.1m²を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。

その後、同年7月20日に九州三菱自動車販売株式会社代表取締役を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、8月3日より発掘調査を、翌平成22年度に整理・報告書作成を行うことになった。

2. 調査の組織

調査委託: 九州三菱自動車販売株式会社

調査主体: 福岡市教育委員会

調査総括: 埋蔵文化財第2課長 田中壽夫

同課調査第1係長 杉山富雄(調査)

同課調査第2係長 菅波正人(整理)

調査庶務: 文化財管理課管理係 古賀とも子(調査)

埋蔵文化財第1課管理係 井上幸江(整理)

事前審査: 埋蔵文化財第1課事前審査係長 宮井善朗

同課事前審査係主任文化財主事 加藤良彦

同課事前審査係文化財主事 木下博文(確認調査)

調査担当: 埋蔵文化財第2課調査第1係文化財主事 榎本義嗣

調査作業: 金子由利子 国友和夫 柴田勝子 柴田春代 高木美千代 時吉ひとみ 廣瀬公則 廣瀬博子
深溝嘉江 藤田満

整理作業: 木本恵利子 橋口三恵子 松尾真澄

発掘調査から報告書作成に至るまで、九州三菱自動車販売株式会社、中野建築システム株式会社をはじめとする関係者各位には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

1. 原遺跡の立地

玄界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によつて画される中小の平野が展開しており、東側から船屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する原遺跡は、このうち早良平野に位置する。同平野の西側には背振山系から北側に派生する飯盛・長垂山塊が延びて、今宿平野と画される。また、東側を油山から北側に発達する丘陵が連なり、福岡平野との境界をなす。平野中央部を博多湾へと北流する室見川や金屑川、名柄川、十郎川などの中小河川による沖積作用によって平野の大半が形成されているが、下流域には第三紀丘陵や洪積台地が点在し、沿岸部には帶状の海岸砂丘が発達する。また、油山北西山麓から北側に飯倉丘陵と呼ばれる高位および中位の段丘が舌状に延びる。

本遺跡は、平野の北東部の金屑川と油山川に挟まれた東西約700m、南北約900mの沖積微高地に拡がる遺跡で、現地表面の標高は約5～7mを測る。また、遺跡の東側を北流する油山川を挟んで南東の微高地上には原東遺跡が所在し、弥生時代前期の集落や貯蔵穴などの集落遺構や弥生時代中期前半から後半の壇場墓地が確認されているが、調査事例が少なく、遺跡全体の消長や評価は今後の調査に期したい。また、本遺跡西側を北流する金屑川を挟んで、Aso-4火砕堆積による洪積中位段丘が八手状に拡がり、有田遺跡群が展開する。旧石器時代から中世後半に至る土地利用が連續となされ、弥生時代初期の環濠集落や青銅器を副葬した壇場墓から該期の拠点集落であったことが窺い知れる。また、台地の高所には古墳時代後期から奈良時代にかけての那津官家や早良郡衙の関係施設が設けられ、律令期の改治的な中核となる。中世戦国期には小田部城をはじめとする城館が數箇所に認められ、軍事的な側面も持つ。

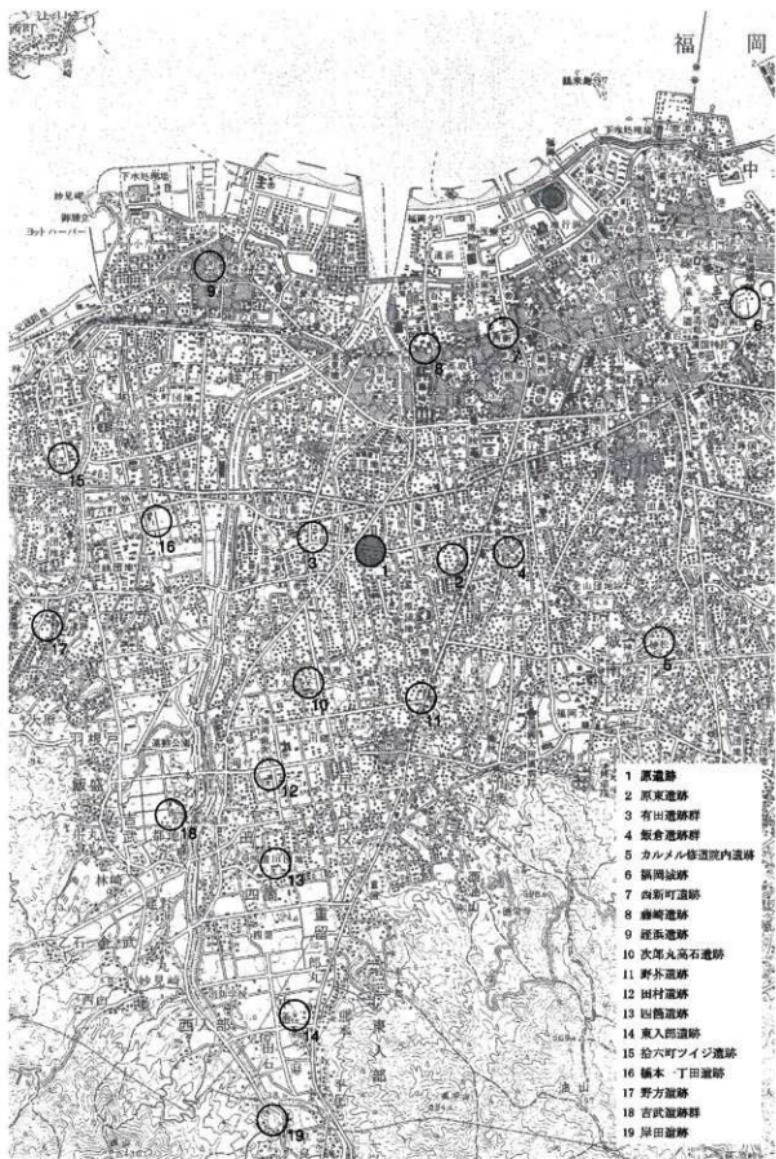
2. 原遺跡の地形とこれまでの調査

本遺跡では昭和51年の第1次調査以降、これまでに27次におよぶ調査が行われ(第2図、第1表)、様々な成果が挙がっている。まず、遺跡内の微地形であるが、現在は昭和45年頃の区画整理やその後の都市開発によって低平な地形を呈するものの、遺跡の東側には油山川の自然堤防が南北方向に比較的発達し、昭和前期の航空写真や古地図によつても集落がほぼこの範囲に形成されていることがわかる。また、その西側には金屑川による自然堤防が狭長に延び、同様に一部であるが、昭和前期に集落が立地している。これらの埋没地形やこれまでの調査所見、また既存水路の位置等から遺跡内の微地形を推定すると、遺跡東側に微高地Aがほぼ南北方向に延び、その西側に東西幅約150mの低地を中央に挟んで並行するように微高地Bが遺跡西側に占地するものと考えられる。微高地の東西幅は、Aが約250m、Bがやや狭い約150mを測るが、共に南端部の状況については調査事例が少なく現在のところ判然としない。なお、本調査区は微高地Bの中央南側に位置する。

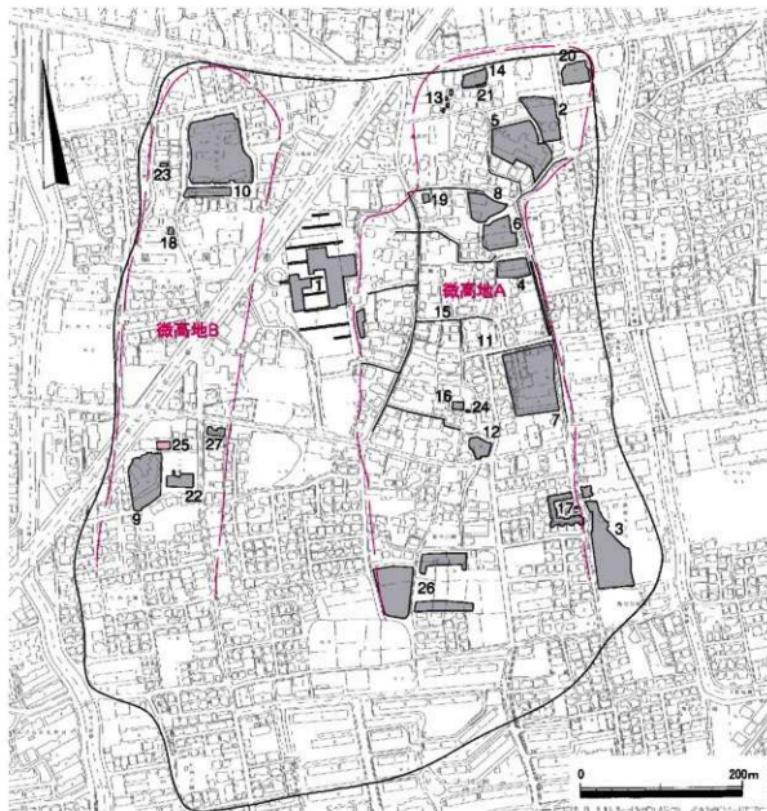
これまでの調査例では、低地部に該当する第1次の大半や第3次で水田遺構や水路が検出され、微高地上での他の調査区では各時代の集落や墓地が確認されている。微高地上の最も遡る時期の遺構として第16・17・26次における弥生時代早期から前期の堅穴住居や貯蔵穴等があり、微高地Aの南側に該期の集落が形成されたことがわかる。中期から後期初頭にかけては、第5・8・14・20次の中高Aの北端部に集落や壇場墓地が展開し、微高地B南側の本調査区や隣接する第9・22でも集落が確認されているが、前代と重複しない傾向にある。第1次では、中期の水田土器祭祀が行われ、生産地として中央の低地が利用されている。古墳時代では前期を主体に第3・6・9・22次で遺構が分布する。遺跡東端部の低地に所在する第3次では自然流路に井堰を設け、灌漑水路を設置することによって可耕地の拡大を図るが、各調査区の微高地上での遺構密度は薄くない。古代では、可能性の有する遺構として第10次北端で検出された条里の東西方向に合致する大溝が挙げられる。その西側延長が有田遺跡群でも確認されており、注目される。中世前半の平安時代後期から鎌倉時代にかけては、両微高地で獨立柱建物や井戸等で構成される集落が広く分布するが、それぞれの継続時期は長くない。中世後半の室町時代から戦国時代にかけては、微高地A中央の第12・16・24次および微高地Bの本調査区を含む第9・22・27次の2箇所で方形に取り囲むと推定される堀を伴う屋敷地が検出されている。

＜参考文献＞

『1:25,000 土地条件図 福岡』国土地理院 2006年



第1図 原遺跡位置図(1/50,000)

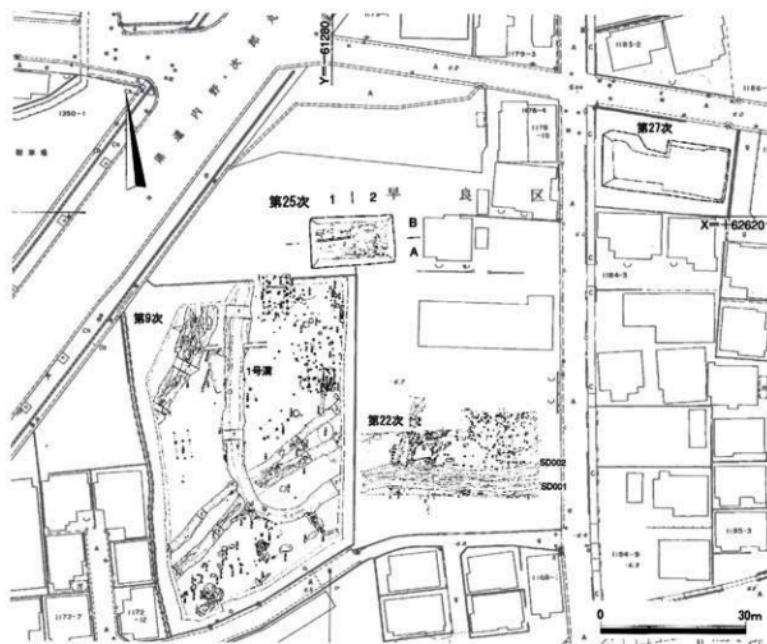


第2図 原遺跡調査区位置図(1/6,000)

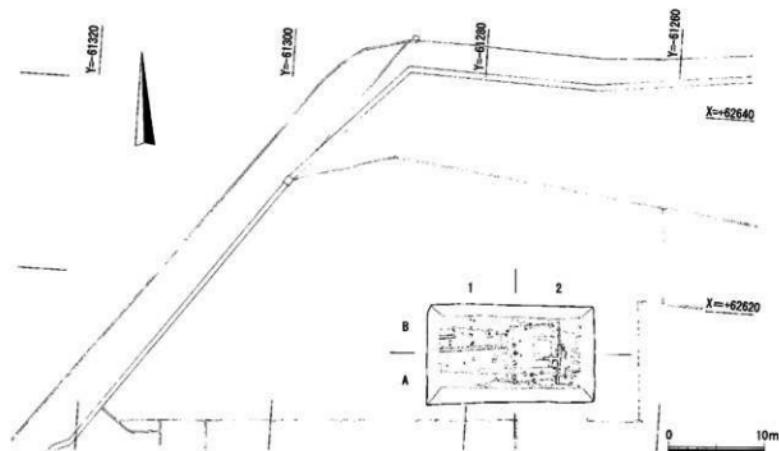
調査次数/調査年数	主な遺構の時期	概 文
第1次 1976	弥生時代(早形・中形)、中世後半	「原遺跡第1次」山形第492集(1996)
第2次 1978	古代～小治代半	「原遺跡2」山形第544集(1997)
第3次 1979	古墳時代(前編)	「原遺跡3」市報第71集(1981)
第4次 1980	古代末～中世後半	「西新町地区埋蔵文化財調査報告」市報第64集(1981)
第5次 1981	弥生時代(中形)、六朝時代	
第6次 1981	古墳時代(前編)、中世前半	「西新町地区埋蔵文化財調査報告」市報第213集(1980)
第7次 1981	弥生時代、古墳時代、中世後半	「施設間山文化財ごより 第3号」(1984)
第8次 1981	弥生時代(中形)、中世	
第9次 1984	弥生時代(中形・後期)、中世後半	「原遺跡3」山形第140集(1996)
第10次 1988	古代、中世前半	「原遺跡3」市報第315集(1990)
第11次 1988	有田小治代14 水城跡	「山形第206集(1991)
第12次 1988	中世後半～近世	「原遺跡4」市報第233集(1990)
第13次 1988	弥生時代(中形)、中世前半	「原遺跡4」市報第328集(1990)
第14次 1989	弥生時代(中形)、中世前半	「原遺跡5」市報第395集(1992)

調査次数/調査年数	主な遺構の時期	概 文
第15次 1989	中世後半	「有田・小治代14 水城跡5」市報第216集(1991)
第16次 1991	弥生時代(後期)、中世後半～近世	「原遺跡7」市報第337集(1993)
第17次 1994	古小治代(初期～中期)、中世前半	「原遺跡8」山形第444集(1996)
第18次 1995	中世	「施設間山埋蔵文化財4号」、Vol. 10(1987)
第19次 1996	中世(前半～後半)	「原遺跡12」市報第917集(2007)
第20次 1999	古小治代(中期～後期)	「京看番16」小治代008集(2001)
第21次 2000	中世後半	「施設間山埋蔵文化財4号」、Vol. 15(2002)
第22次 2002	弥生時代(中期～後期)	「京看番11」市報第813集(2004)
第23次 2006	古墳時代(後期)、中世(前半～後半)	「施設間山埋蔵文化財4号」、Vol. 21(2006)
第24次 2008	中世後半～近世	「施設間山埋蔵文化財4号」、Vol. 23(2010)
第25次 2009	弥生時代(後期)、中世後半	「原遺跡13」市報第1129集(2011)
第26次 2010	中世時代(中期～後期)、中世前半	
第27次 2010	中世後半	

第1表 原遺跡調査一覧表



第3図 調査区位置図(1)(1/1,000)



第4図 調査区位置図(2)(1/500)

III. 調査の記録

1. 概要

今回報告する原遺跡第25次調査区は、早良区原8丁目1176-5に所在し、同遺跡の西端の中央に位置する。「II.-2. 原遺跡の地形とこれまでの調査」で述べた微高地Bの北側緩斜面上に立地しており、南側隣接地では第9次調査、南東側では第25次調査、北東側では第27次調査が実施されている。また、調査前の状況は、建物解体後の標高約6.7mを測る平地であった。

調査区の土層(第6図参照)は、まず現地表下に1m超の真砂土を主体とする客土層(1層)が認められた。これは昭和45年頃に行われた周辺地区的区画整理による造成土と思われる。その下層には部分的に削平されるものの、区画整理前の旧水田層(2a・2b層)が残り、更に3~6層の堆積層を挟んで、今回遺構面としたシルト層に至る。このシルトは、西側ではやや砂質の青灰色、東側では黄褐色を呈する。その標高は南側で約5.4m、北側で5.2mを測り、南側から北側に向かって緩く傾斜するが、東西方向では、顕著な高低差は認められなかったことから、調査区は南北方向に延びる微高地尾根線の北側緩斜面に占地するものと推測できる。なお、このシルト層上層の北側部分には中世の遺物包含層(5・6層)である(灰)茶褐色土が薄く堆積しており、今回 SX006-011として報告を行っている。

遺構検出は、シルト層上面までを重機で剥ぎ取って実施したが、北側では上述した5・6層のほぼ上面までに重機掘削をとどめ、以下は人力にて作業を行った。包含層の遺存しない調査区南側は、水田化による削平がおよぶが、今回の調査では弥生時代および中世後半の掘立柱建物や土坑、溝を検出することができた。出土遺物量は、コンテナケースにして4箱である。

発掘調査は平成21(2009)年8月3日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りを同日に実施し、翌日に発掘器材を搬入した。その後、外柵の設置や壁面の清掃および養生、トラバース杭の設定等を行い、7日より遺構検出を開始した。その後、検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を順次進めた。遺構の掘削作業がほぼ終了した9月2日に高所作業車によって全体写真を撮影した。その後、残った図化作業や個別遺構写真撮影等を終え、7日に重機による埋め戻しや片付けを行った。8日に発掘器材等を撤収して、第25次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、「I.-1. 調査に至る経緯」のとおり、敷地面積1,163.9m²のうち183.1m²であったが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は175.7m²であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴については、報告時においてP1から順に番号を付した。

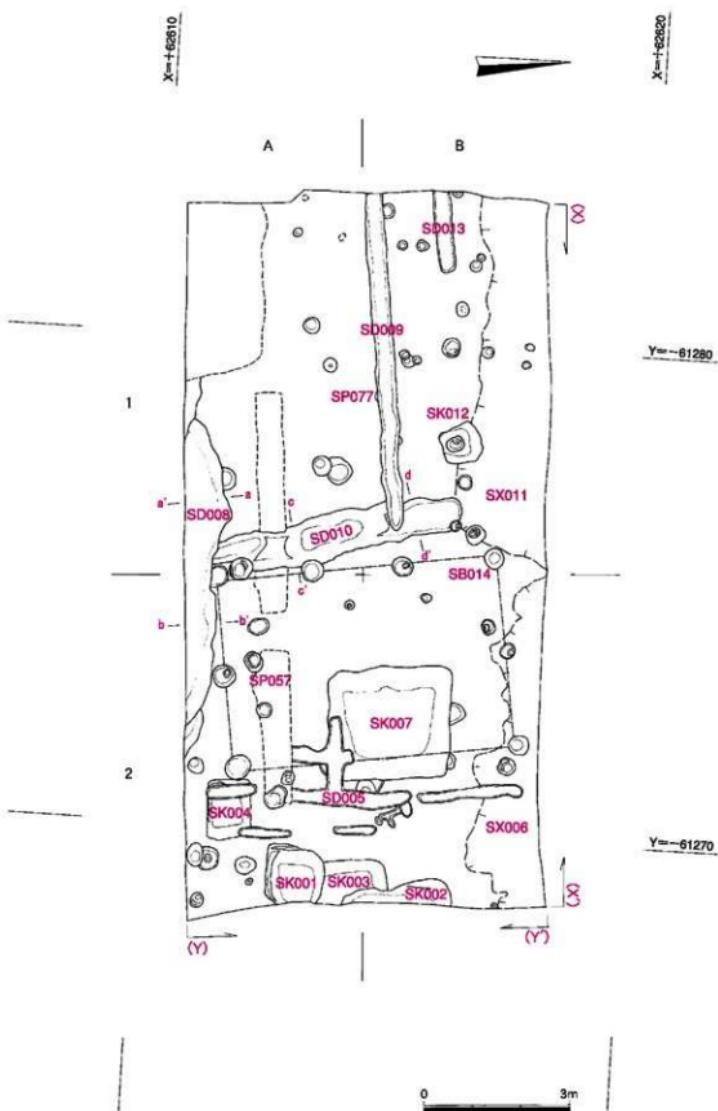
2. 遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置等を本文中で示す際には、調査時における平面座標を基準とした英字(南をA、北をB)と数字(西を1、東を2)を組み合わせたグリッド表記を用いる(第5図参照)。

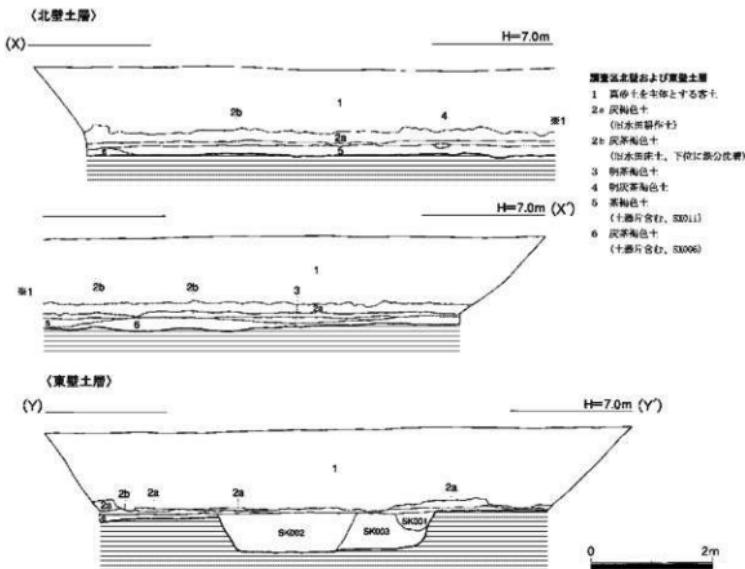
1) 掘立柱建物(SB)

検出したピットは少數で、調査区東側において1棟の建物を復元することができた。

SB014(第7図) A・B-2区に位置する2間×3間の側柱建物で、建物方位はN-3°-Wとほぼ磁北である。周辺遺構との重複関係は、P3がSD005に切られ、SK007を切る。P4はSK004に先行



第5図 調査区全体図(1/100)



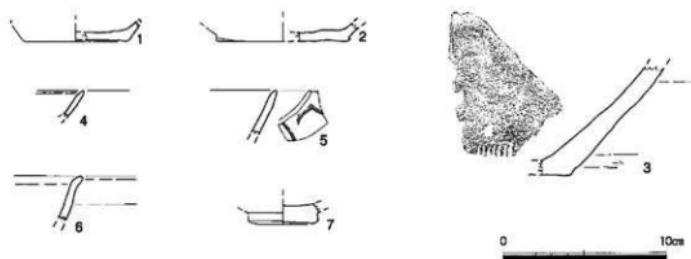
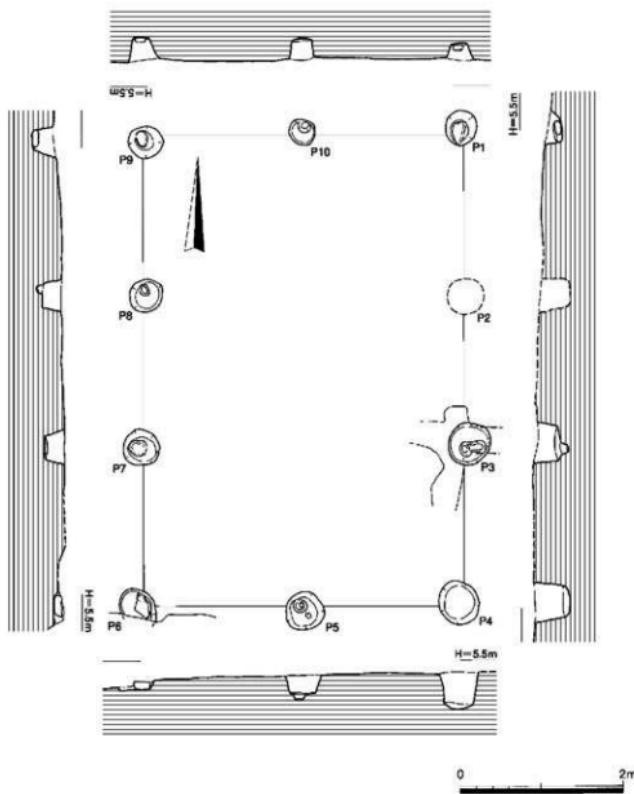
第6図 調査区北壁および東壁土層実測図(1/80)

し、P6・7はSD010より後出の柱穴である。また、P6はSD008に先行する。P1・10はSX006除去後に検出した柱穴である。なお、P3のSK007との前後関係から、P2の位置にはSK007を切る柱穴が存在したことが予測できるが、検出遺漏によって確認できなかつたため、推定位置を復元した。梁間の全長は3.9m、桁行の全長は5.7mを測り、柱間は1.9m前後である。各柱穴は、円形プランを呈し、径0.3~0.5m、深さ0.1~0.5mを測る。覆土は暗灰茶褐色土を主体とする。また、P1・6・7・9の底面には自然石を用いた扁平な根石が据えられる。P1・9は花崗岩、P6は粘板岩、P7は玄武岩である。

出土遺物(第7図) P1・2を除いて遺物が出土したが、いずれも細片で、図化したものは以下の7点である。1・2は板状压痕のない回転糸切り底の土師器で、1はP5から出土した小皿である。口縁端部を欠損するが、推定口径は8.0cmである。2はP7出土の坏底部である。3は土師質の擂鉢片である。外面はヨコナデ、内面はナデ調整を施し、擂目が僅かに残る。胎土には砂粒を多く含み、堅緻な焼成である。P3とP5の接合資料である。4は口禿げで、白磁皿IX類の口縁部片である。P4から出土した。5はP3出土の龍泉窯系青磁碗で、外面にはやや幅広の片彫りによる無鏽の蓮弁文を有する。6は青磁の口縁部片で、端部が外反する。釉色はオリーブ灰で、鈍い発色である。P8から出土した。7はP3出土の黒色磁器天目碗の底部である。外面は露胎、見込みには光沢のある黒褐色に釉が掛けられる。高台内面は浅く削り出す。出土遺物が細片で明確な時期比定は困難であるが、ここでは14世紀前半以降の遺構に位置付けておきたい。

2) 土坑(SK)

以下6基の土坑を報告するが、SK012のみ弥生時代の所産で、他は出土遺物が少ないものの、



第7図 SB014実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3)

中世に位置付けられよう。後者は調査区東側に近接して位置する。

SK001(第8図) A-B-2区で検出した隅丸方形プランの土坑で、SK003の南側を切る。東側の一部は調査区外に位置する。一边約1.2m、深さ0.4mを測り、南側および西側の壁面上位に狭いテラスを有する。覆土には地山に起因する黄褐色シルトブロックが多く含まれる。出土遺物には土師器が少量あるが、いずれも細片である。

SK002(第8図) A-B-2区の調査区東壁際に位置し、SK003を切る。遺構の大半が調査区外に延びるため、詳細は不明であるが、現況で長さ2.2m、深さ0.65mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。SK001同様に覆土にはブロックが目立つ。底面付近では湧水する。

出土遺物(第10図8) 備前焼の擂鉢で、8条の擂目が残る。外面にはヨコナデが施され、凹凸がみられる。他に土師器の細片が少量出土している。15~16世紀の遺構であろう。

SK003(第8図) SK001-002に南北両側を切られ、東側は調査区外に位置する。北西部に残るコーナーから隅丸方形の平面プランを呈するものと推測される。現況で南北方向の長さは2.1m、深さ0.6mを測る。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。覆土には地山に由来するブロックを顕著に含む。

出土遺物(第10図9) 復元口径8.8cmを測る土師器小皿で、外底部は回転糸切りである。板状圧痕はない。内外面はヨコナデを施し、内底部にはナデ調整を加えていない。明黄橙色を呈し、良好な焼成である。他にも土師器が出土しているが、細片である。

SK004(第8図) A-B-2区で確認した端正な方形プランの土坑である。西側の上層をSD005に切られる。また、前述したSB014の柱穴P4を切る。長さ1.2m、幅0.9m、深さ0.55mを測る。傾斜の急な逆台形の断面をなし、底面は平坦である。南西部の壁面は崩落によりオーバーハングする。覆土全体には地山に類似するシルトブロックが多量に含まれ、人為的な埋め土と考えられる。

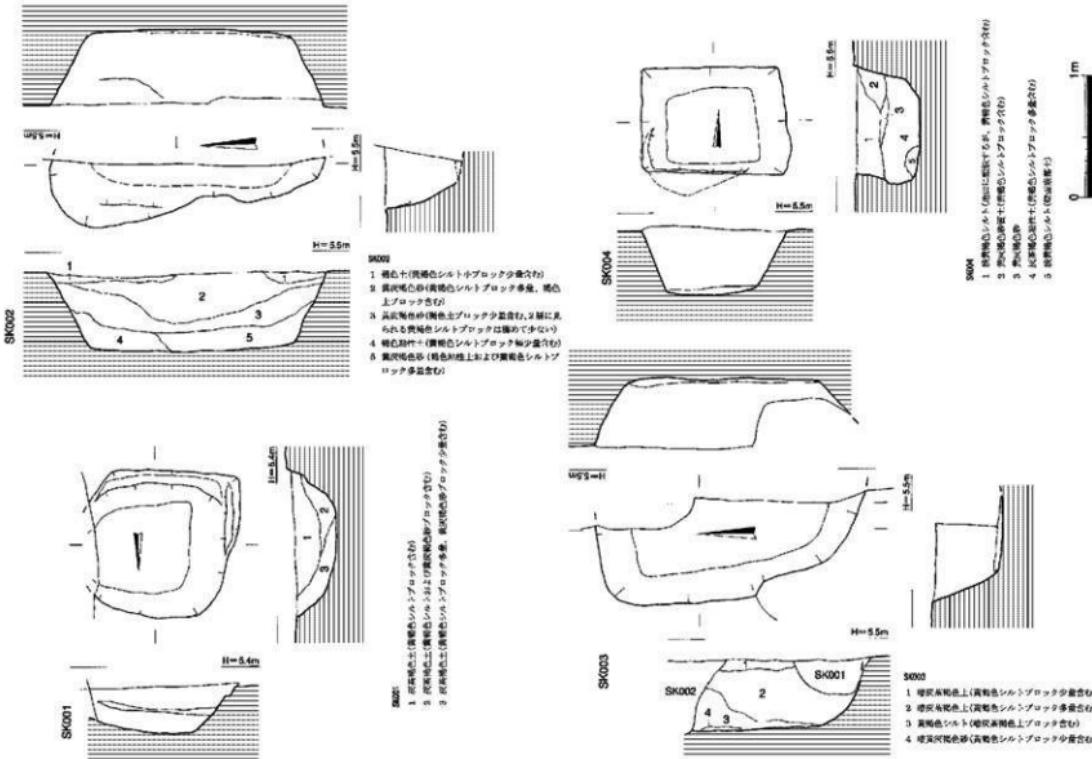
出土遺物(第10図10) 中国陶器の壺と考えられる口縁部片である。短い口縁部は端部を丸く納める。内外面に淡オリーブ灰色の釉が施される。胎土は灰白色で硬質である。他に土師器片が少量出土している。

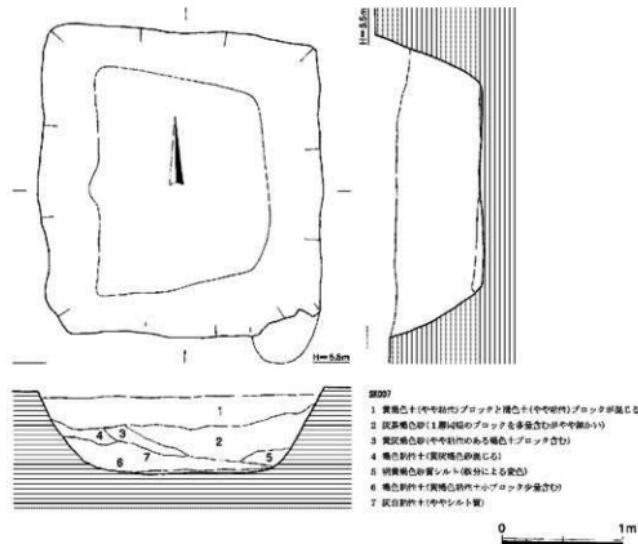
SK007(第9図) A-B-2区で検出した土坑で、南東部をSB014の柱穴P3およびSD005に切られる。長さ2.5m、幅2.3mを測る南北方向にやや長い端正な長方形の平面プランを呈する。断面は逆台形をなし、壁面および底面は直線的である。SK002同様に底面近くで湧水する。覆土の下層は粘性土、中層は砂を主体とし、上層にはブロックが顕著である。

出土遺物(第10図11~18) 11~15は回転糸切り底の土師器で、11は小皿、他は壺である。内外面はヨコナデ調整で、内底部にナデはない。12のみに板状圧痕がみられる。11は口径8.0cmを測り、約2/3が遺存する。下層から出土した。16-17は下層出土の龍泉窯系青磁である。16は盤の底部片で、断面台形状の低い高台から体部が広がる。灰白色を呈する胎土の全面に淡緑色の釉がやや厚めに掛けられる。17は直立する角高台を有する碗で、見込みに不鮮明ながら印花が認められる。釉色はやや灰味を帯び、疊付きの釉を削り取る。外底部にも施釉されない。灰色の胎土は緻密である。18は芯持材を用いた棒状の木製品である。残存長15.1cm、断面は隅丸方形状を呈し、幅4.1cm、高さ3.0cmを測る。端部には幅約1.5cmの方形切り込みを有する。下層出土である。他に土師質土器や白磁等の細片が出土している。中世後半期の土坑であろう。

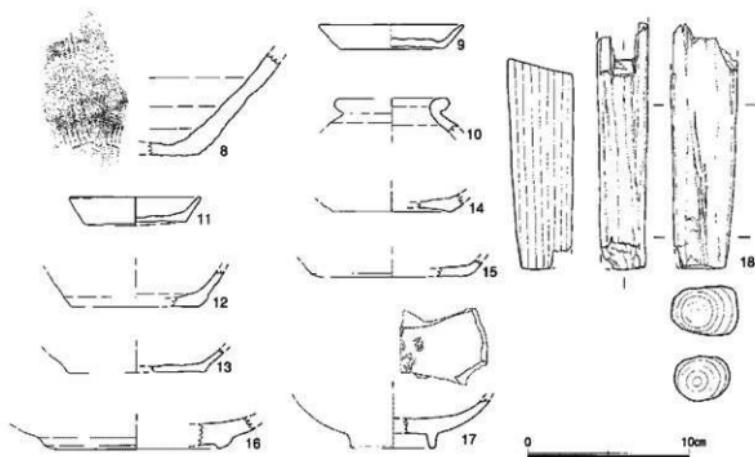
SK012(第11図) B-1区に位置する弥生時代の土坑で、北側は包含層(SX011)を除去して検出した。平面プランは一边が0.6~0.85mを測る不整な方形で、ほぼ中央部に中世のビットが掘り込まれていた。断面形は逆台形状を呈するが、南側壁面の一部は崩落によりオーバーハングする。覆土はややシルト質の黒褐色土で僅かに粘性があり、比較的遺存状況の良好な弥生土器の壺および鉢が廃棄された

第8図 SK001・002・003・004実測図(1/40)

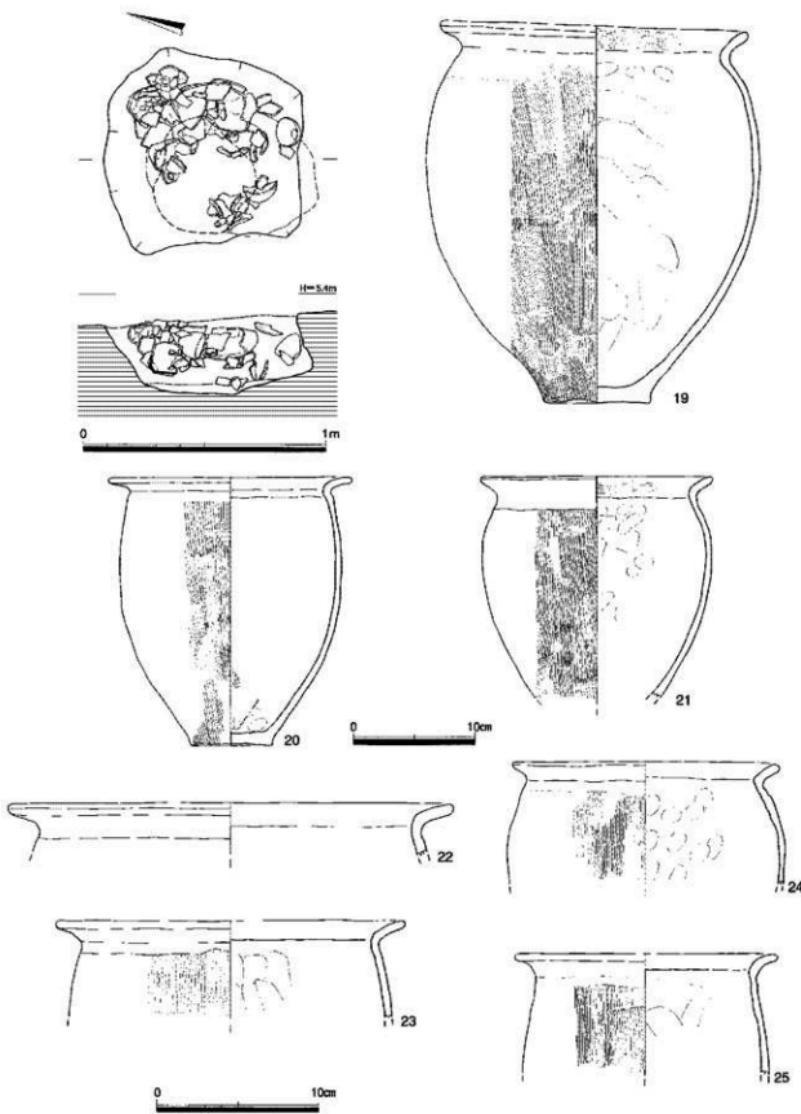




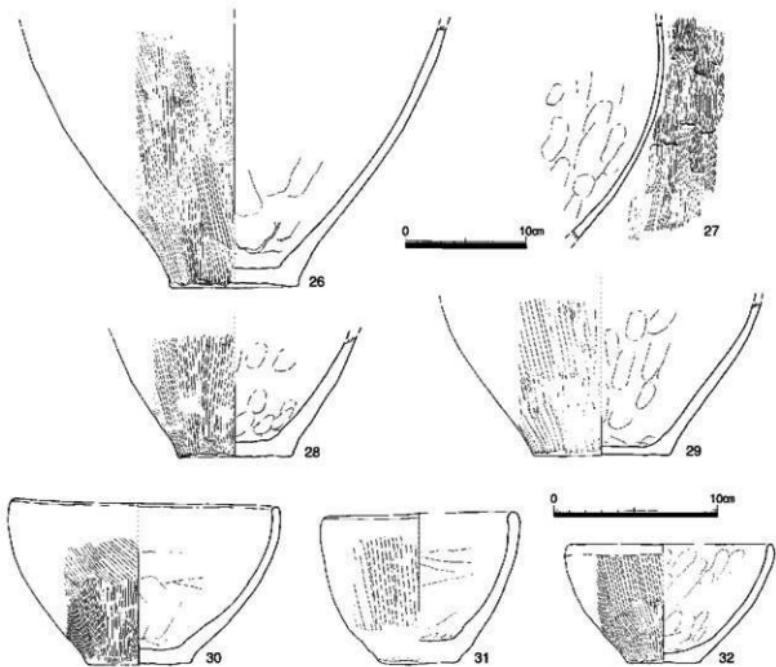
第9図 SK007実測図(1/40)



第10図 SK002-003-004-007出土遺物実測図(1/3)



第11図 SK012実測図(1/20)および出土遺物実測図(1)(19~21は1/4、他は1/3)



第12図 SK012出土遺物実測図(2)(27は1/4、他は1/3)

状況で出土した。なお、細片を含めて壺はない。

出土遺物(第11・12図) 全て弥生土器で、19~29は壺である。この内19~25は口縁部が遺存する資料で、立ち上がる逆「L」字状の口縁形態を呈する。19は約2/3が遺存する個体で、口径25.2cm、器高31.3cmを測る。口縁部の立ち上がりは強いが、頸部内外面の稜は緩い。口唇部は丸く納める。肩部は大きく張り出し、底部に向かって強くすぼむ。体部外面は縦方向の刷毛目を施し、上位から口縁部にかけてはヨコナデを加えるが、口縁部内面には横方向の刷毛目が残る。体部内面はナデ調整や一部に板状工具による掠過風のナデが認められ、指オサエが残る。20は細片の接合によるものであるが、1/2弱が残る小形の壺である。復元口径20.0cm、器高22.0cmを測る。口縁部はやや長く、立ち上がりは弱い。その内面は湾曲して、稜線は鈍い。肩部はあまり張らず、底部に向かうラインは直線的である。体部外面はやや粗い縦方向の刷毛目、頸部外面から口縁部内面にかけてはヨコナデ、体部内面にはナデを施す。21は底部を欠損する口径19.0cmの小形品である。口縁部は立ち上がるが、内面の屈曲は鈍い。肩部にはやや張りがある。19に類似した調整が施され、肩部内面の上半には指オサエがよく残る。22~25は肩部下半以下を欠く資料で、体部外面は縦刷毛目、口縁部は内外面をヨコナデ、内面はナデを施す。復元口径は順に27.2、21.4、16.2、16.0cmを測る。24を除く頸部内面の稜は緩

いが、24は強く屈曲し、明瞭な稜線を有する。また、24のみ薄手の器壁である。26～29は下半が遺存するもので、同様に外面を刷毛目、内面をナデ調整し、指オサエが認められる。27の外面の一部には煤が付着する。30・31は鉢で、口縁部は僅かに内湾して、口唇部を丸く納める。30は約1/2が遺存し、口径16.5cm、器高10.2cmを測る。体部外面は縱もしくは斜方向の刷毛目、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデを施す。31は口縁部の一部を欠損する程度で、遺存状況が良好である。体部はあまり開かず立上がり、口径11.8cm、器高9.3cmを測る。外面は刷毛目調整を行うが、底部付近にはナデを加える。内面は横方向のナデ、内底部は粗い指ナデを施す。32も31同様に遺存状態が良好である。口径は12.4cm、器高7.3cmである。外面はやや粗い縱方向の刷毛目、内面は器面の風化が進むが、指オサエが残る。以上の出土遺物から弥生時代後期初頭の土坑と考えられる。

3) 溝(SD)

計5条の中世以降の溝を検出したが、大半が調査区外に延伸しており、全容は不明なものが多い。

SD005(第5図) A・B-2区に位置する小規模な浅い溝で、幅0.2～0.35m、深さ0.05mを測る。削平により分断するが、南北方向の溝2条と東西方向の溝1条は切り合いかなく、一連の所産と考えられる。南北方向の東側の溝は延長6.5mが遺存する。周辺遺構全てに後出しし、SB014のP3、SK004-007、SX006を切る。覆土は灰褐色シルトを主体とし、出土遺物は土師器類片3点のみである。

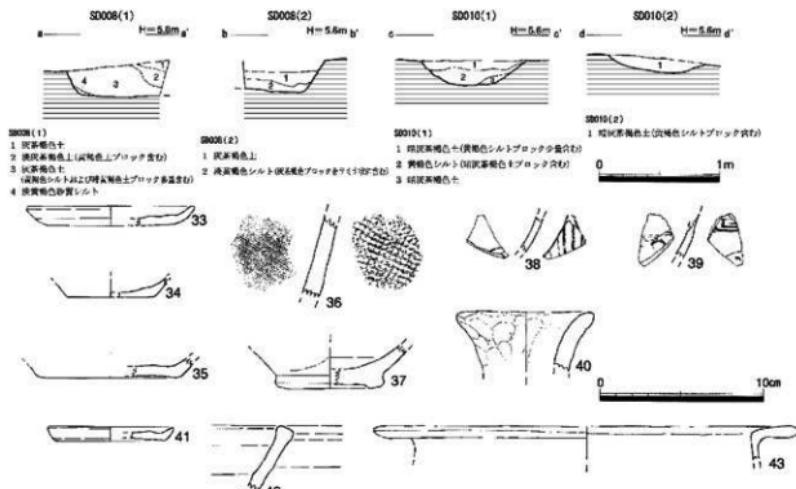
SD008(第5・13図) 調査区南壁際のA-1・2区で確認した遺構で、検出状況から東西方向の溝の北側の肩を検出したものと推定される。ほぼ中央部でSD010およびSB014のP6を切る。現況で幅1m以上、深さ0.3m、延長6m以上を測り、断面は逆台形状を呈するものと考えられる。底面の標高は約5.0mである。覆土の下層には水性堆積物が認められ、水流があったことが窺える。

出土遺物(第13図33～40) 33～35は回転糸切り底の土師器片で、33のみに板状圧痕が認められる。33・34は小皿である。33は復元口径10.2cmを測る小皿で、外底部に板状圧痕を有する。35は壺の底部片である。36は須恵質土器片で、外面は細かい格子目叩き、内面にはカキ目を施す。瓦玉であろうか。37は白磁碗IV-1a類で、見込みに浅い沈線を配する。外底部は露胎である。38・39は明代の龍泉窯系青磁碗の細片である。38は外面にヘラ描きによる細線蓮弁文を施す。また、内面にも施文の一部が認められる。釉色は淡緑色である。39は外面の上半に雷文、下部には蓮弁と思われるヘラ描きによる施文を有する。内面には片彫りによる弧状の文様が残る。やや暗い緑色の釉が施される。40は混入した弥生土器の器台で、指オサエによる調整を行う。他に陶器の細片が出土している。15世紀代の遺構に位置付けられよう。

SD009(第5図) B-1区で検出した東西方向の直線的な浅い溝で、西侧は調査区外に延長する。中央部でSP077、東側端部ではSD010を切っている。幅0.4m、深さ0.1m、長さ6.8m以上を測り、覆土はややシルト質の灰褐色土を主体とする。底面の標高は、ほぼ同一である。出土遺物には、少量の土師器や近世と思われる陶器があるが、いずれも細片である。

SD010(第5・13図) 調査区のほぼ中央のA・B-1区に位置する南北方向の溝である。東側の肩をSB014のP6・7、南側をSD008、北側をSD009に切られる。また、北端部はSX011除去後に確認できた。幅0.7～0.9m、長さ5.2m以上を測る。溝底には段差があり、最も深い中央部で深さ0.3mである。壁面の立ち上がりは緩い。

出土遺物(第13図41～43) 41は復元口径7.6cmの土師器小皿で、外底部は板状圧痕のある回転糸切りである。42は須恵質土器の鉢である。内外面共にヨコナデを施し、口縁部は僅かに肥厚する。胎土には黒色および白色の砂粒を多く含む。43は混入した弥生土器の壺である。逆「L」字状の口縁部を呈し、内面の稜は緩い。他に保存状態は不良であったが、漆製品の被膜が出土している。黒および



第13図 SD008・010実測図(1/40)およびSD008・009・010出土遺物実測図(1/3)

赤漆が塗布される。

SD013(第5図) B-1区で確認した東西方向の深い溝で、SD009の北側約1mに並走する。東側端部は削平によって途切れ、西側は調査区外に延びる。幅0.35m、深さ0.05mを測る。覆土はSD009に類似したややシルト質の灰褐色土である。出土遺物は土師器の細片が3点のみである。

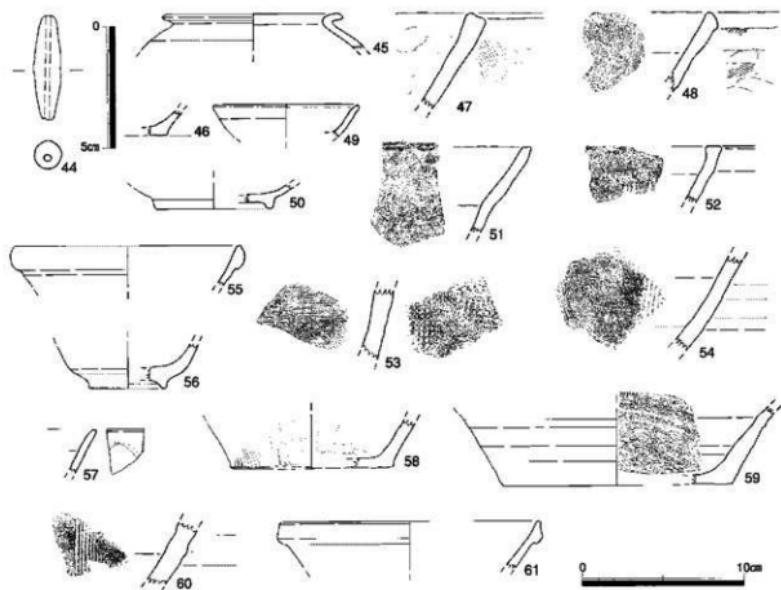
4) その他の遺物

ここでは、ピット(SP)、包含層(SX006-011)、遺構検出時の出土遺物について報告を行う。

ピット(第14図44-45) 44はA-2区に位置するSP057出土の管状土錐である。紡錘形を呈し、長さ4.4cm、最大径1.1cm、孔径0.3cm、重量4.04gを測る。45はB-1区でSD009に切られるSP077から出土した弥生土器の無頸壺である。短く折り返す口縁部に大きく張る脣部が付く。やや薄手の器壁である。

SX006(第14図46~49) SX006は、「III. - 1. 概要」で述べた通り中世の遺物包含層である。第6回土層図のはば6層に相当し、地山面の北側への傾斜に沿って、南側では薄く、北側ではやや厚く堆積する。土層観察では後述のSX011とした5層に先行する堆積であることが判明したが、平面的に認識し、人力で実際に掘り下げた範囲は、第5図B-2区の調査区北東部分である。先に報告したSK002およびSD005はSX006上層より掘り込まれ、SB014のP1-10はSX006除去後に検出した。この包含層に含まれる遺物は少量で大半が細片であった。この内、46は回転糸切り底の土師器底部片である。47は土師質土器の錐で、口縁部が肥厚し、面取りされる。外面に刷毛目を残すが、ヨコナデや指オサエにより仕上げる。48は玉縁状の口縁部を有する瓦質土器の錐で、内外面に細かい刷毛目を施すが、外面は粗くナデ消す。49は口禿げの白磁皿IX類で、細片から復元した口径は9.0cmである。釉色は濃つたオリーブ灰色を呈する。

SX011(第14図50~58) 第6図の5層にはほぼ相当するSX006(6層)同様の中世遺物包含層で、6層



第14図 ピット・包含層他出土遺物実測図(44は1/2、他は1/3)

上に堆積する。人力での掘り下げを行った範囲は、第5図B-1区の調査区北西部分である。なお、SK012およびSD010は、この包含層を除去した後に確認した遺構である。出土遺物は、SX006同様に細片が少量である。50は土師器の碗で、断面台形状の低い高台を貼付する。51-52は土師質土器である。51は口縁部を外反させる鋸で、内面に稜を有し、横方向の細かい刷毛目調整を施す。52は擂鉢で、口縁部上面が面をなす。53は須恵質土器細片で、外面は細かい格子目叩き、内面には刷毛目が認められる。54は備前焼擂鉢で、内外面共にヨコナデを加える。55は玉縁状の口縁部を呈する白磁碗IV類、56は朝鮮王朝の胸器で、体部下半で鈍く屈曲する。灰白色の粗い胎土にやや青味をおびた白色の釉が施されるが、疊付きから高台内部は露胎である。57は龍泉窯系青磁碗で、外面に片彫りによる鍋のない蓮弁文を有する。58は弥生土器の壺底部である。外面は刷毛目、内面は指オサエによる調整を行う。

遺構検出時(第14図59~61) 遺構検出作業時に出土した遺物で、59・60は無釉陶器の擂鉢である。59はやや軟質の焼成で、擂目が浅く、60は備前焼と考えられる細片である。61は白磁碗IV類である。

3. 結語

最後に今回の調査で確認した遺構の時期的変遷や周辺の調査成果を併せた遺構の位置付けについてまとめておきたい。検出した大半の遺構は、出土遺物が少なく、明確な時期比定が困難なものが多いが、遺構の重複による前後関係や覆土の色調の類似性等による類推を含めるとおおよそ弥生時代中期末から後期初頭(Ⅰ期)、中世の後半期(Ⅱ期)、近世(Ⅲ期)の3時期に大別できる。

まず、Ⅰ期の弥生時代の遺構としてSK012とSP077が挙げられる。SK012は後期初頭の小形の廐棄土坑で、出土状況から大半の遺物群は一括廐棄資料として捉えることができるが、甕と鉢のみに器種が限定され、壺や高杯を欠く。壺の口縁部は逆「L」字が立ち上がって、「く」字状に近い形態を呈し、肩部に張りがある。南側に隣接する第9次調査の2号溝や4号溝下層出土の壺も形態が類似し、同時期の所産と考えられる。また、SP077から出土した無頸壺は口縁部の立ち上がりが鈍く、中期末の須玖II式で捉えておきたい。なお、中期後半段階については、本調査区の南東約40mに位置し、第9次調査区に東接する第22次調査区で貯蔵穴と考えられるSK008や第9次調査で1・2号住居跡(円形プラン多主柱タイプ)が確認されている。第9次調査の古墳時代前期の3号溝には、布留式併行の遺物に混じり、弥生時代中期後半の赤色顔料が塗布された袋状口縁壺や精製壺が含まれており、本調査区周辺では中期後半に小規模な集落の形成が始まり、後期初頭で途絶えたものと考えられる。なお、本調査区は遺構の分布も薄く、集落の縁辺部に該当しよう。

次に、時期が逆転するが、Ⅲ期の遺構としてSD005・009・013がある。これらは、後述するⅡ期の遺構と異なり、類似したシルト質の灰褐色土を覆土すること、他遺構との重複関係では全てに後出すること、またSD009から近世遺物が出土したことから該期に位置付けたものである。いずれも浅い溝で、東西もしくは南北方向にほぼ直交する位置関係にある。近世期の耕作に伴うものであろうか。

最後にⅡ期の遺構としては、上述したⅠ・Ⅲ期の遺構を除く大半が含まれるものと考えられる。Ⅱ期の15～16世紀前後に相当する遺物としては、いずれも細片ながらSK002の備前焼擂鉢(8)、SK007の明代龍泉窯系青磁(16・17)、SD008の同龍泉窯系青磁(細繩蓮弁文の38、雷文の39)、SX011の土師賀錘(51)や朝鮮王朝陶器(56)などがあり、後述する一連の遺構である第9次1号溝や第22次SD001・002の出土遺物と類似する組成である。両報告で述べられているとおり、これらの溝の出土遺物は15世紀前半から16世紀前半に至る時期幅があり、Ⅱ期遺構に認められる重複関係は、同時期の併存でないことを示す。また、Ⅱ期の遺構の切り合い関係から先行する遺構はSD010やSK007で、次にSB014・SD008・SK004と続く。SK001・002・003の土坑群も重複し、003が先行する。また、SX006・011の包含層はSB014に後出し、Ⅲ期遺構に先行するものである。よって、Ⅱ期の遺構は1世紀以上の時期幅の中で数基ずつが併存していたことがわかるが、細かい時期差を旨とする材料に欠ける。なお、中世前半期の遺物である白磁碗IV類(55)や白磁皿IX類(4・49)も散見しており、SD010は時期が遡上する可能性もある。また、5・57の蓮弁文を施す龍泉窯系青磁は間弁や舎を欠き、14世紀代から15世紀初頭にかかるものであろう。ここで、以上の本調査区におけるⅡ期の状況と第9・22・27次の周辺調査成果を照らし合わせてみたい。「Ⅱ.-2. 原遺跡の地形とこれまでの調査」で触れたように第9次1号溝、第22次SD001・002、第27次溝は方形区画をなす堀状の遺構である(第3図参照)。なお、第27次調査は整理中のため詳細な言及を避けるが、矩形に折れる溝の北東コーナーが確認されており、第9次同溝、第22次SD001と併せて東西約1町、南北約半町の方形区画が想定できる。また、これらは掘り直しによって区画範囲を拡大したもので、先行する溝として第9次同溝、第22次SD002が相当し、同調査の東端ではその南東コーナーの一部が検出されている。この東西規模は内法で約60mとなる。なお、本調査区のSD008については、上記の区画溝の北辺の一部とも考えたが、覆土や断面形態が異なり、連続する遺構として捉えるには無理がある。これらの状況から本調査区は、時期差がある2本の堀のいずれの内部に位置することとなり、方形区画内の屋敷地の一部であることが想定できる。ほぼ磁方位のSB014は第9・22次で検出されている掘立柱建物群と建物方位が類似し、屋敷地内の建物の一つであろう。また、他のⅡ期の遺構も屋敷内の遺構と考えられる。以上、時期の詳細が不明なまま、推測を重ねたが、今後は方形区画の詳細な規模や時期、屋敷地の構造についてより明確にする必要があろう。

図 版



作業風景



図版 2



(1) 調査前状況(北西から)



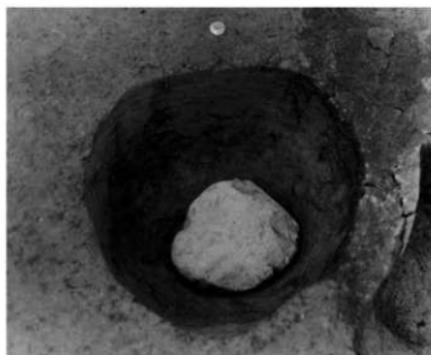
(2) SB014(北から)



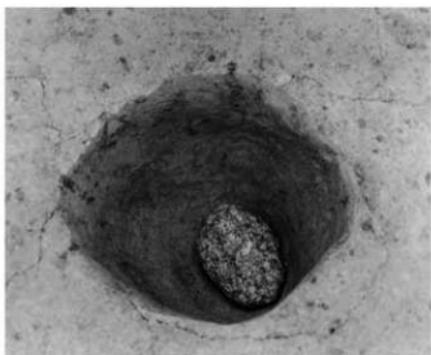
(3) SB014-P1(西から)



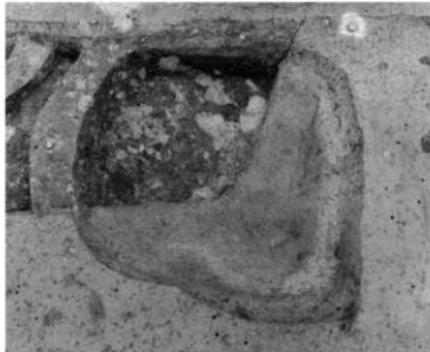
(4) SB014-P6(北から)



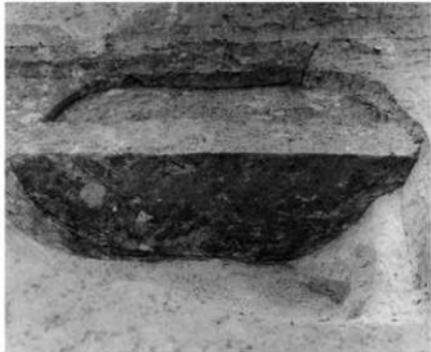
(5) SB014-P7(北から)



(6) SB014-P9(北から)



(1) SK001(西から)



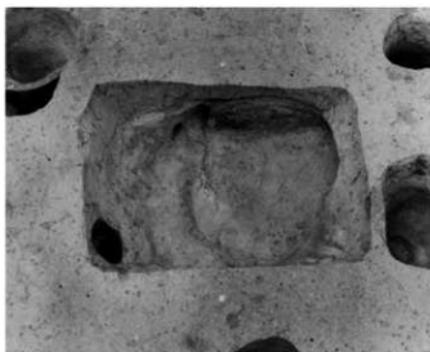
(2) SK001 土層(西から)



(3) SK002(西から)



(4) SK003(西から)

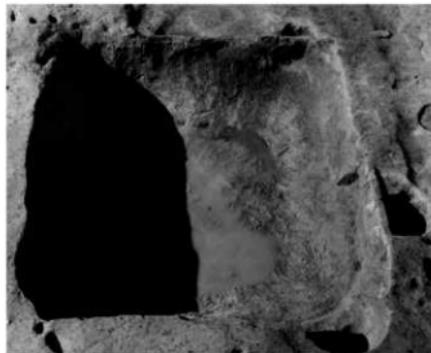


(5) SK004(北から)



(6) SK004 土層(東から)

図版 4



(1) SK007(南から)



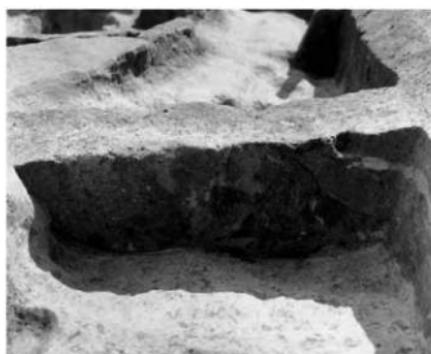
(2) SK007 土層(南から)



(3) SK012(西から)



(4) SD008(西から)



(5) SD008(a-a')土層(西から)



(6) SD008(b-b')土層(東から)



(1) SD009(東から)



(2) SD010(北から)



(3) SD010(c-c')土層(南から)



(4) SD010(d-d')土層(南から)

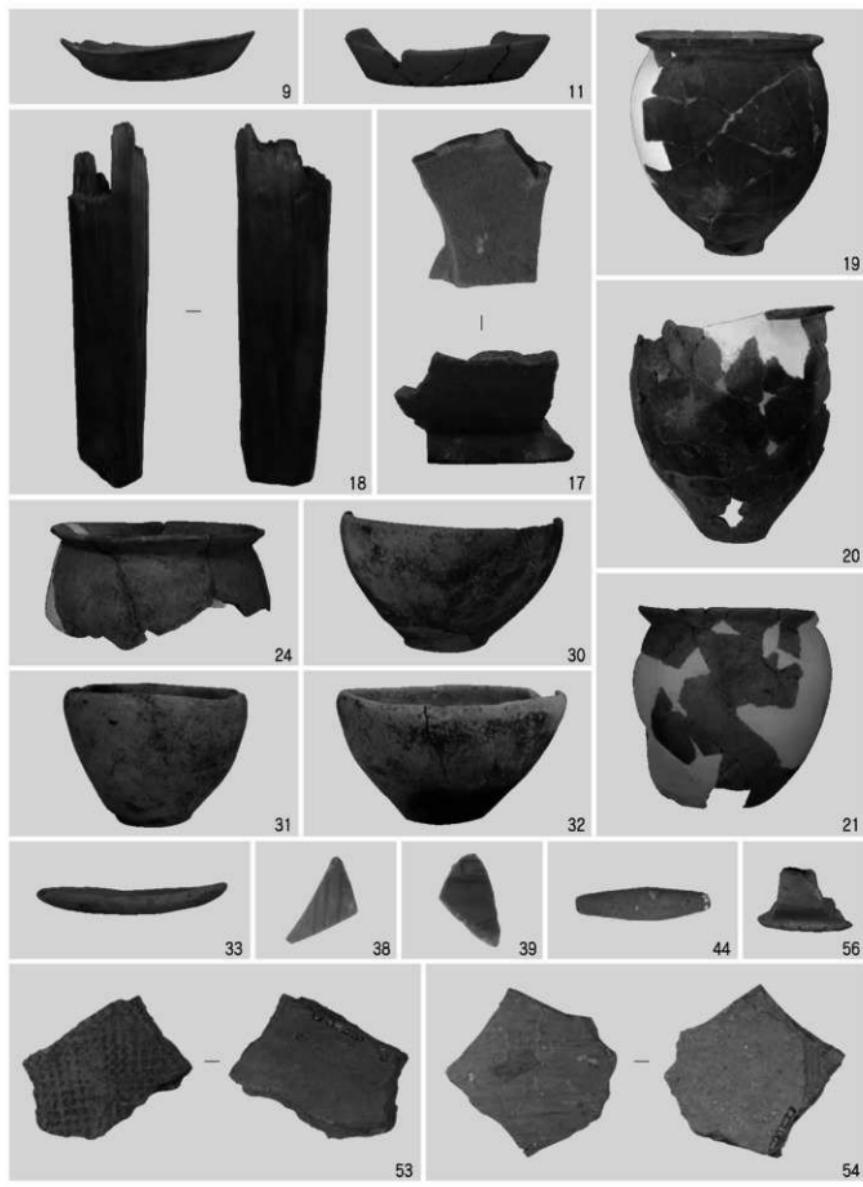


(5) 調査区周辺風景(西から)



(6) 調査区周辺風景(北東から)

図版 6



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はらいせき13 ーだい25じちょうさほうこくー							
書名	原遺跡13							
副書名	ー第25次調査報告ー							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1129集							
編著者名	榎本 義嗣							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2011年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はらいせき 原遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 さわらくはら 早良区原	40137	020311	33° 33' 46"	130° 20' 24"	20090803 ～ 20090908	175.7	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
原遺跡	集落	弥生時代、戦国時代	掘立柱建物・土坑・溝 遺物包含層	弥生上器・上師器 土師質土器・須恵質土器 国産陶器・輸入陶磁器 木製品		中世後半期の屋敷地を確 認		
要約	今回の調査面積は狭いが、近接する調査地点の成果と併せて、弥生時代中期から後期初頭の小規模な集落が形成されていたことが判明した。また、中世晩回期には、方形に区画された堀に囲まれた屋敷地が設けられており、本調査区で確認した掘立柱建物等はその一部であったと考えられる。							

はらいせき 原遺跡 13

ー第25次調査報告ー

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1129集

2011(平成23)年3月18日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

(092)711-4667

印刷 高良印刷

福岡市中央区港2丁目4番1号

(092)771-7415

